

植民運動前夜の英国経済（上）

——十六世紀の経済不況とその対応——

越 智 武 臣

【要約】 国際経済の変化が、どう国内経済に影響し、どのような国家政策を馴致するか。現代という時点に立つて、無関心を装おけない問題のひとつにこうした問題がある。本稿は、近代初頭の英国における、両者の連関を追求しようとしたもの。そして、十六世中期こそは、近代英国史上にいくつか現われてくる国民経済と国家政策の、まずその第一の屈折点であったことを明らかにしようとした。研究史的には、この時代の国際経済に関するわが国の通説にも触れたが、この点については、さらに議論の発展と教示が待たれる。しかし、従来もっぱら国内経済史的観点の優位性において行われた近代英国経済史研究を、国際的連関において位置づけるという操作は、研究の道程からいっても、その問題意識においても、十分に理解してもらえと思う。

一 問題の所在——近世初頭の国際経済

英国史上、いわゆる「近代的な」主権国家が確立したのは、一五三〇年代であった。これが国際政治のうえでいえば、あの英国独自の形をとった宗教改革という事件によって、また国内政治のうえでは、この事件をめぐる一連の行政革命によって達成せられたことについては、いましばら

く周知のこととして、議論を出発させたいと思う。^①ところで、宗教改革が終結をみた一五四〇年代のはじめから、一五五八年エリザベス一世の登位を迎える約二〇年間の英国には、ヘンリー八世の残された七年の晩年と、前後の光芒に姿を消したような、二つの治世が横わっている。いうまでもなく、少年王エドワード六世（一五四七—五三）とカトリック・メアリー（一五五三—五八）の短命な治世である。

一般に、この十六世紀二三半期の英国を、どう評価するかという問題については、これまでの諸權威のことばは、かならずしも積極的なものではなかった。たとえば、一史家は、その円熟した政治史研究の結末を、次のような判断に托した。「一五三八年のはじめまでに、ヘンリーは王国と国教会とその血統を確立していた。この治世の物語りは、色褪せてはならないにしても、比較的意義の少ないものだ」と。文化史家の説くところも、ほぼ同断である。エラスムス、モアらに代表される初期ルネサンスの潮流は、宗教改革とともに一度せき止められ、シェイクスピアの出現までは、約一世代の空隙を経験した、と。翻って、従来の社会経済史研究についてみても、これも周知のように、漸移的な農民層の分解、毛織物工業の発達、それに応じた社会的新陳代謝、要するに近代的農工業の成立過程が、千篇一律に説かれるだけで、とくにこの時代がどうだ、といった議論に出会わさない。^④こうして、研究者は、宗教改革時代から、いとも簡単に、エリザベス朝時代へと跳びうつる。あいだにはさまれた時代は、たかだか新旧両教の血醒い争覇のエピソードに綴られた時代として、言及されるにすぎないの

である。いはいかえれば、敬虔な少年新教王、『一般祈禱書』の制定、そして、これに続く「血まみれたメアリー」のカトリック反動の時代——かつて前世紀のウィッグ史家たちが与えた、このようなテューダー史解釈のイメージは、現行の教科書の叙述をみても分るように、決して変化をみたとはいえないのである。しかし、考えてみれば、このような歴史解釈の欠陥は、それが余りにも政治史的であり、理念史的事実であるということと同意ではあるが、要するに欠陥の最たるものは、次の点にあると思われる。すなわち、最近の歴史研究の動向は、英国においても、またわが国においても、とくにこの時代に関する、社会経済史研究の異常な発達であつたということができようが、その成果たるや、ほとんど従来の政治史的解釈、ましてや文化史的解釈を、動かしてないという奇妙な現象である。たとえば、營々として掘られた、社会経済史研究の無数の隧道をよそに、まだ伝統的なウィッグ史観の山容は、旧態依然とした形をとどめているのである。このような、個別研究と全体解釈の乖離は、われわれの英国史研究において、あながちこの時代だけでも限られないが、そこには新史学と称しな

がら、いつまでも陳腐な方法を教条視してきた、これまでの社会経済史研究の土俵的な視野の狭さと、また一般史家の無協働にも原因がないとはいえない。

ところで、社会経済史研究も、それが社会学・経済学の一分野であると同時に、歴史学の一分野でもある限り、最小限度次の要件を充さなければならない。まず、前者としては、対象がどれくらい計量的研究にたえうるものであるかどうかということ、つぎに歴史学としては、時代把握の問題が、やはり第一に大きな課題となつてこざるをえない。しかも、この両者のあいだには、素材としての計量的結果が判明しなければ、時代把握も不可能であるという因果関係が存在する。このような観点から、従来の社会経済史研究の成果をふりかえってみるとき、さきの計量的研究という点については、少なくとも十八世紀以前の研究者は、はなはだ不満足な立場にあることを認めなければならぬ。^⑥たとえば、これまで多くの研究者が情熱を注ぎ、その意味で、わが国英国社会経済史研究の大きな遺産のひとつとなつた、農民層分解の研究ひとつをとり上げてみても、他国と比較したその深度や規模については、正直のところ、論

者が確言しているだけの結論がでてきたわけではない。依然とした論争の継続は、逆にその困難性のなによりの証拠である。少なくとも、一国経済の動向を卜するに足る史料が揃っているわけではない。国内市場の研究も、その例外ではなからう。したがって、資本主義成立史の研究視角として行われたこうした研究も、要するにでてきた結果は、そこに自生的・漸移的な農民層分解がみられ、市場の形成がみられ、その意味で、資本関係の成立がみられたという、一種のタウトロギーに終つた観があり、一般史解釈にとつて、それほど積極的な結論がえられたわけではなかった。したがって、すでにこの時代において、英国が「古典的な」資本主義の歩みをはじめたという、経済史家の常套語に対しては、まだまだ多くの留保がつけられねばならぬのである。

経済史研究に必須の計量的研究ができてない——それも上述のような研究対象を撰ぶ場合、ただ断片的にしかのこっていない史料制約からいって、おそらく当分不可能事に近いことを認めねばならない——ということ以外に、従来の研究が陥つた一種の麻痺状態があったとすれば、それは

いまさきにも指摘したように、固形化してしまった歴史意識の停滞であったといつてよからう。あるいは、ひとつの方法がゆき詰まれば、別の方法をとってみるという、努力の不足であったといつてもよい。しかし、私がここで歴史意識といったことには、もう少し深い意味がある。かつてフィッシャー教授は、その著名な論文のなかで、「二〇世紀は、要するに十六世紀をば、みずからのイメージにおいて、たえずつくりかえつつある」と書いたことがある。私がここでいおうとするのも、歴史学のもっている、このナルシサスの意味にはかならない。なるほど、農民層の分解、局地的市場圏の展開といった、もっぱら国内経済の問題が、われわれの歴史意識の中心課題となった時代があった。と同様に、英国においても、いわゆる「国内事情の問題」Condition of England question が、一種の標語となり、これに則したマス・オブザヴェイションが、一世を風靡した時代もある。私がここで念頭においているのは、英国においては、とくに第一次大戦後の学界事情であるが、かの大恐慌を転期とする世界経済の、ひいては国際情勢の新しい変化は、このような歴史学にも別様の視角を与えた。端

的にいえば、国際経済の動向とそれに対応する国家政策の相関という問題への開眼であるが、われわれも、いま紀元に立つて、ふたたび過去を眺めるときに、こうした問題接近の重要さを見逃すわけにはゆかない。そして、もうひとついい忘れてならないことは、このような視角に立つときのみ、われわれは、かなりたしかな計量的数字を駆使するということである。このさい、国内経済が先か、国際経済が先か、という不毛な議論に立入っている余裕はない。あえていえば、両者は不可分なものであり、分離しては考えられない、ということを付言しておくにとどめる。

さて、このような観点から、英国史上において、いわば「失われた世代」である、一五四、五〇年代という時代を眺めてみれば、どういふことになるであろうか。あたかも一五三〇年代が、この国民の政治・文化生活のひとつの転期となったように、この時代こそは、まさに国民経済の曲り角に立っていたことを、われわれは改めて認識させられるのである。この点を明らかにするために、しばらく、近代初頭の英国をとりまく、国際経済の見取り図を描くことから始めたいと思う。

① この点については G. R. Elton, *The Tudor Revolution in Government, 1533-1603, England under Tudors, 1555*, において彼の一連の論文を指摘しておきたい。なお邦語文献の注目すべきものとして、大野真弓「イギリス宗教改革と絶対主義」(『横浜大学論叢』昭三四)、植村雅彦「イギリス国教会成立に関する一考察」(『史林』四三の三、昭三五)、熊田淳美「イギリス初期絶対王政下の議会と官僚」(『西洋史学』五七、昭三八)、などがあろう。

② S. T. Binoff, *Tudor England*, p. 112.

③ R. W. Chambers, *Thomas More, 1493-1535*, pp. 379-382. これに対する見解としては、D. Bush, *The Renaissance and English Humanism, 1558*, pp. 73-74. 筆者自身の意見にのっとり、(「ジャントルマン・イデオロギの形成—英国近代国民文化の系譜」(『立命館文学』二〇三、二〇四、昭三七))についてみられた。とくに二〇四号、四三頁以下。

④ この点は、とくにわが国の学界についていえることである。英国の学界においては、のちにのべるように、新しい問題接近の方向がみられる。

⑤ 十六・七世紀経済史研究への反省については、とくにフィッシャー教授の就任演説が想起されるべきであろう。F. J. Fisher, *The Sixteenth and Seventeenth Centuries: The Dark Ages in English Economic History? Economica*, N. S., vol. xxiv, No. 93, 1957. (船山栄一「イギリス経済史における十六・七世紀」『経済学論集』二七の一、昭三四、はその紹

介である)。

⑥ F. J. Fisher, *Commercial Trends and Policy in Sixteenth-Century England*, Ec. H. R., Vol. X, No. 2, 1940, p. 96; E. M. Carr-Saunders, *Essays in Economic History, 1935*, p. 153. 参照 cf. L. B. Smith, *The Taste for Tudor since 1940, Studies in the Renaissance*, vol. vii, 1960, p. 167.

⑦ たとえば C. L. Mowat, *Britain Between the Wars, 18-1940 (1956)*, p. 480. 以下を参照。なおこの史学を代表するものとして「トリー史学を指摘しておきたいから。拙稿「トリー教授の死に思う」(『歴史学研究』二六七、昭三七)参照。一般に「ウィック史学とトリー史学の問題」および「トリーからフィッシャーへ」の問題意識の転位については、二十世紀史学思想史の課題として、いずれ取り扱いたいと思っている。

ヨーロッパ近代初頭の国際経済については、従来次のようなことが、漠然と考えられてきた。すなわち、一四九二年コロンブスによる新大陸発見以来、ここからヨーロッパにもたらされる莫大な銀が、他方東印度商品、とくに胡椒を中心とする香料買付けのため、東洋に輸出されるという関係から、東印度貿易と新大陸貿易とは、著しく異なった性格をもちつても相互にかたく結びつく。いいかえれば、アメリカ銀をその掌中に握りえた国が、同時に東印度貿易を

も支配しうるという可能性が出現したこと、しかも、その銀を入手するには、その対価として、織物なんかずく毛織物を豊富低廉に供給することである、と。いうまでもなく、近代初頭のヨーロッパ・新大陸・東洋を結ぶ、「三角貿易」の成立についての有名なテーゼである。しかし、余りにもよく知られているために、一見自明なようにみえるこの仮説も、些細に検討してみるとときには、案外それほど自明でないことに気がつく。少くとも、もっと慎重な検討を必要とするように思われる。^①まず、一、二の素朴な疑問から始めてみよう。その第一は、そもそもアメリカ銀の流入ということについてであるが、これが一五二〇年代のメキシコ征服に始まり、三〇年代のペルー侵略によって、次第に増加の一途をたどりながら、ことに四五五年の有名なポトシ銀山の開発によって急増したことにについては、すでに統計的結果もえられている。たしかに、それはおびただしい銀の流入であった。しかし、いまこれを、もう少し注意深く数字についてみれば、一五四五年以前の大大陸銀の流入量は、たとえば四五年から六〇年間の流入量の、僅かに約八分の一に過ぎず、新大陸産銀史の全体からみれば、異常に少な

いことが確かめられる。したがって、今われわれが問題としている十六世紀前半期においては、スペインにはともかくとして、新大陸の黄金境^{エルドラド}が、他国ことに英国のような僻遠の地に、どれだけの魅力であったかは、大いに疑問とされなければならない。事実、英国の新大陸貿易は、このころほとんど特記すべきものをもたない。^②疑問の第二は、大陸銀の輸入そのものが、いったいそれほどの対価を必要としたのだろうか、ということである。周知のように、近代初頭の新大陸の銀開発は、スペイン人征服者^{コロンブス・ピサロ}のもとに課せられた、原住民インディオの苛酷極まりない強制賦役によって行われた。それは対価貿易以前のものであり、このような片貿易の結果が、スペイン経済の将来と新大陸住民に、どのような悲惨をもたらしたかもよく知られている。^③毛織物が、その対価として、輸出せられたというのであるが、もちろん、その事実を否定するものではないが、今のところ、それがどれくらい量の量に達したかを示す具体的な数字はなく、開拓当初の諸般の事情は、ますますこうした推定を過大視することを戒めているように思われる。早い話だが、毛織物輸出のためには、その販路があることが第一

の条件となろうが、主に中南米に入植した初期スペイン植民地の風土的条件に加えて、その人口については、これも正確な数字はないが、移民は遅々として進まなかったというのが、どうも実情のようである。^⑥また、移民の社会的階層から考えても、その消費水準も知れたものであったろう。以上は、スペイン移民についての印象であるが、北欧系移民の定着は、これもスペイン政府の独占と制限とによって、さらに遅れた。ヴァジニアに、最初の英国移民が永久的な根を下ろしたのは一六〇七年、ニュー・イングランドは、周知のように一六二〇年のことである。こうして、十七世紀ともなれば、こうした植民運動のあとを追って、新大陸貿易が、やや本格的な形をとってくるのであるが、しかしまだ十七世紀末においてさえも、英国に関していえば、レイフ・デイヴィズの最近の研究が示しているように、その新大陸貿易は、対ヨーロッパ貿易に比べて、輸出货量はまだ六分の一にすぎなかったことが分るのである。^⑦したがって、こと少なくとも、今問題の十六世紀において、毛織物の主要市場が新大陸にあるとみる、いわゆる三角貿易の展開というテーゼについては、どの観点から考えても、そ

の可能性はかなり疑わしいものとなってくるのである。

ところで、ここに次のような問題が生じる。というのは、当時のヨーロッパにおける主要産業である毛織物生産国といえ、まず指を屈しなければならないのは英国であるが、この国の毛織物輸出は、のちに掲げる統計からも明らかのように、まさにこの十六世紀前半において、異常な伸びを示しているのである。そこで、もしも新大陸市場を重視すべきではないとすれば、いったい、この毛織物はどこに輸出されたのかという、当然な問題が生ずる。これに答えることこそ、実は十六世紀英国経済史にとって、はなはだ重要な意味をもっている。もちろん、この際輸出毛織物が、直接スペインに輸出され、あるいはどこかの市場を経由しつつスペインに渡り、そこからさらに新大陸に向つたろうという想定もなしえないことではない。一五三〇年、ヘンリー八世による「スペイン会社」の認可は、英西両国間の貿易の存在を、確認せしめるものである。しかし、これとて十六世紀においては、その意義を過重視することは、当を失していよう。ヘンリーのとつたスペイン王女キャサリンの離婚、続く宗教改革の諸政策は、このカトリックの

牙城と取りひきした、英国商人の運命を見舞わなかったはずはない。頻々とした英国商人に対する迫害の事実をのこして、これも四〇年代の末までには、とるに足りないものとなってしまう。再びスペイン会社再興の動きがみられるのは、十七世紀に入ってからのことである。かくして、近代英国の形成期、毛織物工業の演じた役割を重視すればするほど、いったいその市場はどこにあったのかという、先刻の問題に立ち帰ってこざるをえないのである。

① 周知のように、このテーゼは、とくにわが国において、大塚久雄教授の業績に典型的な叙述がみられ、ひろく流布された見解であると思う。同氏『近代欧州経済史序説』上、昭二一、五四頁参照。

② たとえば、大塚教授前掲書、三三頁。

③ 当時新大陸商路の開拓は、たえざる国王からの干渉を受けているし、プリストルをはじめ西方諸港は、史上もっとも沈滞の時期にあったことが想起さるべきである。西方諸港の復興、従って、その新大陸貿易の開始は、少くとも十七世紀中期以後に属する事実である。G. D. Ramsay, *English Overseas Trade during the Centuries of Emergence, 1557, pp. 24, 161.*

④ 拙稿「スペイン史概説」『地理と世界の歴史』一、昭三〇。

⑤ 前掲、大塚教授の著書にも、実際の数字はあげられてない。

⑥ 新大陸移民奨励の困難については、たとえば、C. H. Haring, *Trade and Navigation between Spain and the Indies in the Time of the Hapsburgs, 1918, p. 105 et passim.* 次のようなスペイン政府の移民独占権について、本書を参照。

⑦ R. Davis, *English Foreign Trade, 1660-1700, Ec. H. R., vol. vii, No. 2, 1954, p. 151, Table I.* を参照。なお、この拙稿も、一九五七—五八年度ハル大学における同氏のセミナーに負うところ多いことを記して、感謝の微意を表わした。

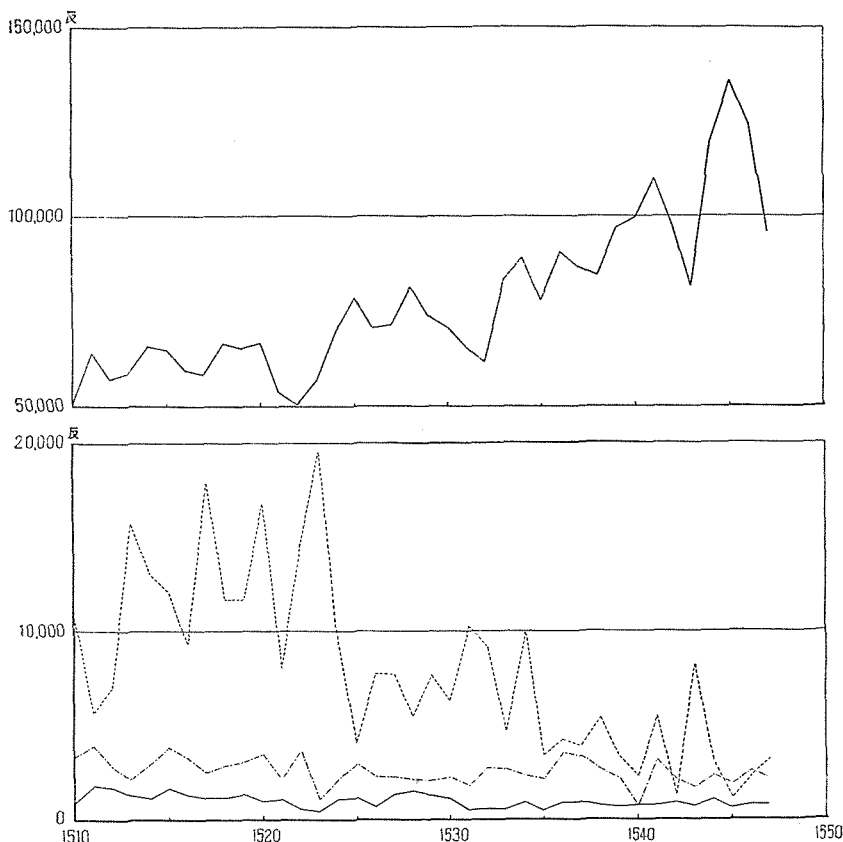
⑧ J. A. Williamson, *Maritime Enterprise, 1485-1558 (1913), pp. 217 seqq.*; Ramsay, *ibid.*, p. 25. なお、cf. G. Connell-Smith, *English Merchants Trading to the New World in the Early Sixteenth Century, Bulletin of the Institute of Historical Research, xxiii, 1950, pp. 53-67.* 大塚教授前掲書、四五頁では、この点、十六世紀における「スペイン会社」の意味がかなり重視されている。同世紀における対スペイン貿易をどの程度にみるか、問題のあるところである。

いったい、十六世紀という時代を、とくに経済史的に眺めたとき、この世紀が、従来の英国経済のパターンを大きく変えたものとして、首都ロンドンの発展があったことは、までは一般によく知られている。① 中世末期においても、この首都の比重が決して少なかったというのではない。人口はこれに続く、ヨーク、プリストルの約三倍、しかし、

せいぜい二万足らずの人口差がこれを示しているように、しばらく政治的観点をはずせば、経済的には、その差異も程度問題であつたといつてよからう。ましてや、すでにルネサンスの光まばゆい南欧の諸都市と較べれば、そのおくれは論ずるまでもなかった。アルプスの南に懂れた十五世紀英国ヒューマニストの眼に映つたものは、たんに古典の学問だけではなく、またそこに蓄積された富の量でもあつたのである。ところが、十六世紀が終るまでには、ロンドン^①は、他都市を大きく引き放した、フィッシャーのいう「顕著な消費の中心地」となつていた。すでに、エリザベス朝ヒューマニストの眼には、南欧都市にもわかに魅力を増じてくるのである。いったい、こうした首都の変化はなぜ起つたのか。ここに、考えてみなければならないのが、十六世紀英国経済に占める、ロンドンの特殊な位置と繁栄とについてである。また、これもいまでは、たいがい明らかなことであるが、周知のように、英国毛織物工業は、十四世紀後半において、羊毛原料輸出国より、製品輸出国への、フアートルな境界を飛躍したといわれている。^②一三四七年には、初めて自国毛織物商人に対する輸出課税の施行

をみる。この傾向が、以後多少のリセッションをくりかえしながらも、成立期にある近代王権の財政的基礎をうるおし、また大陸とは違つた広範な農村工業の母胎に支えられながら展開したことについては、これまた幾多の論文によつて論証せられてきたことである。ただ、これまでも注目されながら、ことの重大さほどには強調されなかつた点があるとすれば、これこそ、最大の毛織物輸出港としてのロンドンの登場、ビンドフのことを借りれば「ロンドン・アントワープ枢軸」London-Antwerp axis という、英国経済に打ちこまれた巨大な商路の意味だつたのである。^③すでに、ヘンリー八世の治世初年において、首都の港湾は、最大の輸出品未染色毛織物についていえば、全国貿易量の実に八割をはきだしている。この趨勢は、ほぼ十六世紀を通じて変るところがない。^④十六世紀英国経済史を貫いている、この巨大な白色帯をより鮮明に浮き上がらすために、しばらくその周辺部をのぞいてみよう。

試みに、上掲図は、ゲオルク・シャンソンの古典的な統計表を、筆者において計算し、グラフにしたものである。^⑤年代がヘンリー八世の治世だけに限られている欠陥はあるに



(上図はロンドン、下図は順次に本文の諸港を示す)

しても、ロンドン毛織物輸出の上昇傾向は、まぎれもない事実であろう。と同時に、これと対蹠的なサウサンプトン、プリストル、ハルなど、いわゆる主要な「地方港」貿易の明らかな下降傾向を窺取することができる。しかし、人もし同様な図表化の操作を、前記シャンツの統計について繰りかえすことをいとわれないならば、上記都市のほか、南方ではエクセターがそうであり、東海岸では、ボストン、イプスウィッチ、サンウィジ、ヤーマス、リン、北方ではニューカースルがそうである。テューダー時代初期のサウサンプトン貿易の衰微については、以上の図表を裏づけるものとして、とりあえず最近のラドックの研究を指摘しておきたい。このころのハル貿易の状態を告げるものとしては、一五七三年の次のような史料がのこっている。⑥「一、昨今は、

重要な貿易の大部分が、この町からとり去られた。かつてはそこで売るために、全部当市にきていた商品も、いまでは大部分上手の河（筆者註、ハル河に対し、ハンバー河の意）で積荷され、一部はロンドンへ、一部は海を越えて、フランスその他の場所に送られる。決してハルの港にはこなくなつた。これこそ当市の商売、繁栄には大きな痛手となつてゐる。二、大商人は、組合（筆者註、ロンドン冒険商人組合）との関係密である。その指導者は、王国の他の諸港からは遠くはなれたロンドンの市民である。しかも、その指導者たちは、自分らに都合のよい規約はつくるが、それが国内の他の商人には、しばしば有害な負担となる。三、上記組合があるがために、全貿易品がロンドンにもたらされる。かくて富裕な商人、最上の織元たちもまたロンドンへと引きつけられる。結局、他の諸港では取引きも止み、町は非常な零落をみる。われわれは、いまその苦しみをキングストン・アポン・ハルに感ずる。」現在も、濁つたハル河の河面に下りるいくつか往時の船着場のあとを見ることができ。私事にわたる回想ではあるが、事実英国史の流れも、再びそのきざしを洗うことはなかった。いや、ハル商人

の「苦しみ」も、典型的なものではない。かつては、ガス・コーニッシュ貿易の基地として、十四世紀には、全国毛織物貿易の半分以上を積み出したブリストルでも、中世末以来この方面の貿易で、市内の最富裕を誇つたウィジール家がロンドンに去り、ヘンリー八世の治下には、アントワープ貿易商人として、冒険商人組合長となる。ニューファウンドランドの探検家、ソーン文法学校の創設者として、これも同市の名族ソーン家も、十六世紀には首都に居をうつしている。十六世紀中葉、ブリストルの人口は、首都の十分の一にも充たなかつたのである。これを、たとえば十五世紀における、さきあげた両市の人口比と対比してみよ。時世の移り変りは明らかなはずである。「昨今、ロンドン市民は、外国貿易だけではなく、この地方の商品である、ウェールズの鉄、メンディップの鉛、亜鉛までも独占した」という一五九七年のブリストル市長の請願は、決して誇張ではなかつたはずである。^⑩ハル、ブリストルの二市は、時代が変れば、またある程度は繁栄をとりもどすこともできた。しかし、上に記した諸港市のなかで、今日往時の繁栄を追想させる都市が、いくつあるというのか。たしかに、

英国経済は、十六世紀において、あらまし現在のパターンを定着させたといえる。要約すれば、彗星的な首都の超大化と、これに反比例するいわゆる「地方港」の地盤沈下、これこそ、この時代に顕著さを加えてくる、まぎれもない事実だったのである。と同時に、いまやわれわれは、こうした経済動向の地平に横たわる、巨大な磁場を見極めることができる。すなわち、フントワープ市場の展開という事実にはかならず。

- ① なかみちべつれめン・マンナーの画期的論文 F. J. Fisher, *The Development of London as a Centre of Conspicuous Consumption in the Sixteenth and Seventeenth Centuries, Transactions of the Royal Historical Society, Ser. IV, xxx, 1948, pp. 37-50; do., The Development of the London Food Market, 1540-1640, Ec. H. R., v. (1934-5), pp. 46-64. 以下同様の参考。*
- ② 十五世紀のロンドンについて cf. C. L. Kingsford, *Prejudice and Promise in Fifteenth Century England*, 1962, Chap. v. *London in the Fifteenth Century*; Sylvia L. Thrupp, *The Merchant Class of Medieval London, 1300-1500* (1948).
- ③ フイッシャー、前掲論文参照。ステュアート王朝ジェイムズ一世のロンドン嫌いが、実は首都の巨大さにあったというエビ

ソードを付け加えておくことも無駄ではなう。Fisher, op. cit., p. 37 (*Transactions of R. H. S.*). Soon London will be all England. とは、この王の言。また、後期ヒューニズムにみえる初期ヒューニズムからの一種の偏向が、何に由来するかは考えてみなければならぬが、次第に "Inglese italiano" に対する反感をのこらせつゆへに経過につれては「前掲拙稿「フン・マン・マン・マン」参照。

- ④ E. M. Carrus-Wilson, *Trends in the Export of English Woollen in the Fourteenth Century*, Ec. H. R., ser. II, vol. III, 1950, pp. 162-79.
- ⑤ Bindoff, op. cit., p. 20.
- ⑥ Ramsay, op. cit., pp. 10, 161; F. J. Fisher, *London's Export Trade in the Early Seventeenth Century*, Ec. H. R., vol. III, pp. 153-4.
- ⑦ G. Schanz, *Englische Handelspolitik gegen Ende des Mittelalters*, 1881, Bd. II, SS. 86-105. 数字は未仕上毛織物 (Ungefärbte Tücher) についての統計表のなかの "Einheimischen", "Fremden", "Hanseaten" による各数字を加算した。簡易化した表は L. Stone, *State Control in Sixteenth Century England*, Ec. H. R., vol. XVII, 1947, p. 119 の付表にみえ、また F. J. Fisher, *Commercial Trends in the Seventeenth Century*, Ec. H. R., vol. XVIII, 1948, p. 139 三年平均の表がみえるが、筆者の計算と合わないところもある。なお角山栄『イギリス毛織物工業史論』昭三五、一四六頁にロンドンに関しては、すでにその図表化がみえる。

⑧ A. Riddock. *London Capitalists and the Decline of Southampton in the Early Tudor Period*, Ec. H. R., ser. ii, vol. ii, 1949, pp. 137-51.

⑨ S. P. D. Eltz., vol. cvi, no. 59, cf. R. H. Tawney and Eileen Power, *Tudor Economic Documents*, 1924, vol. ii, p. 49. 十六、七世紀のハル市については、私信によれば、近々デヴィス博士の研究がでるはずである。

⑩ Ramsay, op. cit., pp. 135-6. ノーメンは Williamson, op. cit., pp. 113-4, 117.

アントワープ。「たとえ父親はアントワープの市門で絞首されようと、この町にくる英国人の子供なら、その股間をくぐって町にもぐりこむ」①。当時フランドルの諺はいたという。これくらい、十六世紀英国人の利害と結びついたアントワープとは、そもそものようなところであったのか。ロンドンとは一帯帯水、ネーデルランド、シェルト河口を扼するこの地の盛時については、たとえばわれわれは、グイッチアルディーニの有名な叙述をもっている。

「実際、外国人はここアントワープとネーデルランドにおいて、世界中どこにもみられない自由を享受している」。この地が、従来北欧最大の市場であったブルージュの繁栄を奪ったことについては、いろいろな原因が考えられるが、

それが、なにかんづくこのフイレンツェ人のいう「自由」にあったことは、まず強調しておかなければならないことである。いうまでもなく、「自由」とは通商上の自由である。

「民族言語のいかんを問わず、あらゆる商人の使用のために」*Ad usum mercatorum quisque gentis et lingae*

——有名な「取引所」^{バース}の献辞が、いみじくもこれを示していたように、いくぶん比喩的なことばの使用が許されるとすれば、あたかも十六世紀ヨーロッパにおける「共同市場」^{コンソーシアット}、それが現実のアントワープの姿であった。独占と関税の網の目のはりめぐらされた当時の世界にあって、この岸壁に上れば、人は少くとも異った世界にあることを発見した。「そこでは、雑然としたあらゆる国のことばが聞かれる。

ありとあらゆる衣服を纏ったまだらな人の群」と、これも時人は描写している。この世界市場が、十六世紀に与えた意味合いは、これまた新しい現在のヨーロッパのように、たんに経済的なものだけでもない。その普遍的精神の体现者が、北方ルネサンスの巨人エラスムスであったことは、ここにもべるまでもなからう。トーマス・モアが『ユートピア』の背景をここに選んだことも、考えてみれば象徴的

なことであり、また新教と異端は、ここにいち早く根をおろし、商人はこれを運んだ。かくて、このなかからデューラー、クラナッハ、ホルバインら、ドヴォルシヤクのいうネーデルランド派絵画の光と陰がまたたいてくる。

しかし、このように繁栄を極めた世界市場も、もとはといえば、中世末以来の英国冒險商人の来住とともににはじまっている。^⑧冒險商人——羊毛取引のため、もっぱらカレーと本国とを往復したステープル商人に対し、新しい毛織物商人をこう呼ぶにいたった経緯、それが前者を圧倒していった経過については、これもいままでに何回となく論ぜられた。さきにも触れたように、十四世紀後半の毛織物工業発展のあとをうけ、大陸市場を求めつつあった英国商人が、最終的にこの地に定着したのは十五世紀後半、ほぼ時を同じくして、ドイツ商人の移住がみられ、これに先立つ南欧商人の来住とともに、アントワープ最大の商人群を形造ることとなる。^⑨そこにもたらされたのが、青天の霹靂にも似たあの地理上発見のニュースであった。十五世紀末以来、ポルトガル王室もここに商社をもったが、一五〇一年には、はやくも東洋帰りのポルトガル香料船の第一便が、はじめ

てシエルト河を遡ったのである。それからまた数年後、フッガー、ウェルザーら、南独アウグスブルクの巨商たちの定着によつて、アントワープは名実ともに、世界市場としてのブルージュにとつて代つた。英国商人が、この地にくるようになったのには、少くとも二つの理由が考えられる。第一には、従来英国毛織物の主たる買付け先であつたガスコーニュ地方が、百年戦争の余波を蒙ることによつて大きく疲弊したこと、^⑩第二には、ドイツ・ハンザとの激甚な競争によつて、英国商人のバルト海貿易からの完全な敗退があげられる。^⑪前述したように、ガスコーニュ貿易港として栄えたブリストルの没落、北海諸港の衰亡が、決して偶然の結果でなかつたことがここに知られるのである。したがつて、ポスタンのいうように、たとえアントワープ市場の開拓が、「勝利ではなく、敗退の一副産物」として解釈されなければならないにせよ、いやそれ故にこそ、のこされた唯一の市場としてのアントワープに賭けた英国の努力は、なみなみならぬものであつたといわなければならない。近代的通商条約の先駆とされる、一四九六年の有名な「マグヌス・インテルクルスス」Magnus Intercursus が、いか

に成功裡にこの地における英国商人の特権を確保しえたかは、兩次大戦を経て今にこの、アントワープ大聖堂の一枚のステンド・グラスが雄弁にこれを物語っている。これこそ、守銭奴として悪名高かったヘンリー七世の、現存するをえなかった喜びの記念なのである。^④

① Fisher, Commercial Trends, Carus-Wilson, Essays, p. 154.

② L. Guicciardini, Descriptione di tutti i Paesi Bassi, 1560. Tawney and Power, Tudor Economic Documents, vol. iii, p. 157. (一五八二年の F. De Belle Forest による伝説である)。^⑤ なお、メントワープの素描にさうして以上のものを参照。H. Pirenne, Histoire de Belgique, vol. ii, pp. 399-403; R. Ehrenberg, Das Zeitalter der Fugger, Bd. ii, SS. 3-68; R. H. Tawney, Religion and the Rise of Capitalism, pp. 82-87. (出口勇藏・越智武臣共訳『宗教と資本主義の興隆』岩波文庫、上巻、昭三十一(一九二一)三頁) Ramsey, op. cit., pp. 10-20.

③ Schanz, Bd. i, S. 9; Bd. ii, S. 572 冒險商人の来住に関する史料は、最初のものとして、すでに一四〇七年のものがあつた。その後、ノートレヒト、ミデルブルヒなどを転々として最終的にここに居を定めるのは、十五世紀後半である。cf. W. Stein, Die Merchant Adventurers in Utrecht, Vierteljahrschr. für S.-W. Gesch., ix, 1900, SS. 179-89.

④ 独伊商人の間にいつかは、なかんずく J. Strieder, Aus Antwerpener Notariatsarchiven, 1930; J. A. Goris, Etude sur les colonies marchandes méridionales à Anvers de 1488 à 1567, 1925. を参照。

⑤ Carus-Wilson, Trends in the Export of English Woollens in the Fourteenth Century, Ec. H. R., vol. iii, No. 2, 1950, pp. 162-79; R. Bouteuche, La crise d'une société: seigneurs et paysans du Bordelais pendant la Guerre de Cent Ans, 1947, pp. 198-9.

⑥ M. M. Postan, The Economic and Political Relations of England and the Hanse from 1400 to 1475. cf. Eileen Power and M. M. Postan, Studies in English Trade in the Fifteenth Century, 1933, pp. 91-154.

⑦ Ramsey, op. cit., p. 14. 「フシックス・メントマンズ」にさうして cf. Tudor Econ. Doc., vol. ii, pp. 11-15.

二 十六世紀中期の経済不況

十六世紀前半の国際経済のなかで、アントワープ市場こそは、英国貿易の死命を制するものであつた。すでにそのころまでに、同地における英国商人の数は、三、四百人。もちろん、ドイツ商人に次いで、最も大きな外人居留地を形成した。しかも、「その大部分は、シメントルマンの子

弟、資産家・良家の子供」とジョン・ウィラーも書いているように、当時英国社会のエリートを動員したのも不思議ではない。^①それではいつたい、かれらを通じて取引される英国商品は、アントワープ市場を経て、どこに向ったのであろうか。われわれは、さきにこの時期における英国産毛織物の新大陸向け輸出に関しては、その可能性に疑問を表明しておいた。とすれば、それを裏づけるためにも、次に解決しなければならないのはこの問題である。

ところで、この問題に重要な光を投げかけるものであるアントワープ市文書の研究は、そのぼう大さのために、現在までのところ、十分な研究が行われているとはいえない。^②とくに、経済史研究にはきめ手となる、統計的数字については、われわれはここでも、はなはだ不満足な状態にあることを、認めねばならぬ。次に引用する計数は、主としてブリュレの最近の研究成果によるものであるが、決して全般的研究とはいいたいまでも、だいたいの流通のすじは見きわめることができ、それはまた現在英国の——わが国ではない——研究結果とも一致するもののようにである。すでに、グイッチアルディーニも注目していたところ

であるが、アントワープ在住商人のなかで、もつとも目立たいしい商人群といえば、まずドイツ商人、ついでイタリア商人であった。前掲ブリュレの論文によれば、十六世紀四〇年代、アントワープを起点とする貨物輸送総額の五〇％がドイツ向け、四一、五％がイタリア向けであったといわれるから、まず両国商人でアントワープ貿易を折半したとみてよい。このうち、商人の活動状況は分っているが、数字のはっきりしないドイツ地方についてはしばらくおき、^④まずイタリアへの輸出について考察することにした。

次頁の表は、各国商人によるアントワープ・イタリア間の貨物輸送の状況を示している。^⑤みられる通り、何と云っても圧倒的な活躍をしているのは、地元イタリア商人であり、ついでフランドル、ドイツ、スペイン、ポルトガル商人の順となり、運送に関するかぎり、英仏商人の役割は、ほとんどるに足りない。ついでながら、当時のイタリア貿易については、海路はほとんど問題にならず、主として巨大運送業者による陸路が利用されたが、これがまた東路・西路の二つに分かれていたことも、今日とはほぼ同様である。東路は、まず例外なくケルンを通り、ドイツ国内において

アントワープ発貨物輸送先(単位リーヴル)

商人出自 輸送先	イタリア	フランドル	ドイツ	イペリア	フランス	イギリス
アンコーナ …	100275	9791	566	17350	682	…
ヴェネチア …	38106	37795	29638	2601	…	666
ジェノヴァ …	33057	…	…	45	…	…
ミラノ …	23733	281	105	549	…	…
フェラーラ …	10393	11124	1191	650	37	…
トレント …	2987	7205	28	…	…	…
パヴィア …	9105	…	…	…	…	…
ルッカ …	6986	…	…	…	…	…
フィレンツェ …	2684	20	…	1343	…	…
マントヴァ …	3733	189	…	…	…	…
ナポリ …	3222	…	…	…	…	…
ベサロ …	814	2356	…	…	…	…
ヴェローナ …	887	2052	125	…	…	…
ローマ …	1470	799	…	16	…	…
ブレンシア …	649	923	…	…	…	…
ボローニャ …	729	…	…	10	…	…
リヴォルノ …	550	…	…	…	…	…

分岐しつつ、最後はアルプスの東側に沿ってヴェネチアにで、西路はスイスを経て、これまた例外なく、サン・ゴタルド越しにミラノにでた。^⑥ いま、こうした当時の二大商路を念頭におくとき、ドイツ商人、とくにアントワープを抑えていたケルン商人が、東路を利用したことは、想像にかたくない。これに反し、イタリア商人は、西路によつたのである。上掲表中、ドイツ商人による貨物の輸送先が、主にヴェネチアであることは、これを示すものといえよう。と同様に、イタリア商人による運送貨物は、半島の諸都市に分散されながらも、その約四一%までが、これまたアンコーナに集中されていることを知るであらう。さらに、他国商人による運送の場合も併せ考えれば、アントワープを起点とする対イタリア貿易は、まず第一にアンコーナ、ついでヴェネチアという、二つの主たる目的地をもつていたことを、はっきりと確認できる。なお、これに劣らず重要なことであるが、すでに指摘したように、アントワープよりドイツ地方に向けられる貨物の量は、同市よりイタリアに向けられる貨物の量を上廻る、全貨量の約半分に達するものであった。としてみれば、上掲表にみえるドイツ

商人の対イタリア物貨輸送の相対的な僅少さから考えて、ドイツ地方に向けられる物貨の大部分は、ドイツ国内およびそこを経て、中欧・東欧の市場に流れたものとみて差支えないのである。そして、いまさらいうまでもないことであるが、アントワープを振出すこれら物貨の内容が、主として英国産毛織物であったことは、統計の上にもはっきりと現われてくる^⑥。因みに、各国商人のイタリア向け輸出品の八〇%以上は、各種繊維製品であった。これを要するに、当時アントワープに陸揚げされた物貨は、ここを仲継市場としつつも、しばしば考えられているように、そこからスペイン、あるいは新大陸に流れたものではなく、まずヨーロッパ本土、なかんづくドイツおよび中欧で消費され、他はイタリアを経て、レヴァント貿易を志向するものであったと断言できる。アドリア海沿岸の港市アンコーナが、とくに著しい物貨の集散地であったことは、そのなによりもの証拠である。また、これに関連して、アントワープに活躍したドイツ商人の主軸となったケルン商人が、とくに《Englandfahrer》と呼ばれた事実を想起しておきたい^⑦。当時、国民国家の形成がみられず、分邦的なその

政治事情から、統一的な関税政策もおぼつかなかったドイツ地方が、英国製織物のいかに恰好の市場として浸蝕されたかについては、一世のナシヨナリスト、ルターもまたつとにこれを認識していた^⑧。著名な織元ジョン・ウィンチュウムの製品は、レヴァントおよびハンガリーに販路をもっていたことが知られているし、^⑨ コッツウオルド丘下の小村カースル・ユウム Castle Combe の製品は、《Kasselhoehe》の名のもとに、これまたひろく大陸に知られていた。ふたたびここでも、ビンドフの巧みな表現に従えば、英国産毛織物の行程は、「イングランドの羊の背にある毛に始つて、ハンガリー貴族の背に羽織つた外被に終つた」^⑩ といつて差支えないのである。

① Ramsay, op. cit., p. 18. ウォーラーの『商業論』 A Treatise of Commerce にあつては、Tudor Econ., Doc., vol. iii, p. 285.

② これまでの研究としては、なかんづく J. Goris の前掲書があげられるが、本書の史料操作も最近ブリュッレにより批判された。なお、cf. O. de Smedt, De engelse nati te Antwerpen, 1954.

③ Wilfrid Brulez, L'Exportation des Pays-Bas vers l'Italie par voie de terre au milieu de XVI^e siècle, Annales,

Economies, Sociétés, Civilisations, Juillet-Septembre, 1959, pp. 461-491.

④ ドイツ商人の活動については、前掲 J. Strieder の著書のはかたどき以下のような論文を参照。J. Müller, Das Rodwesen Bayerns und Tirols im Spätmittelalter und zu Beginn der Neuzeit, Vierteljahrsch. für S.-W. Gesch., Bd. iii, 1903; E. von Ranke, Die wirtschaftlichen Beziehungen Kölns zu Frankfurt am Main, Süddeutschland und Italien im 16. und 17. Jahrhundert, V. S. W. G., Bd. xvii, 1923; H. Thimme, Der Handel Kölns am Ende des 16. Jahrhunderts und die internationale Zusammensetzung der Kölner Kaufmannschaft, Westdeutsche Zeitschrift, Bd. xxi, 1912.ただし統計のなうのが遺憾である。

⑤ Brulez, Annales, tom. xiv, op. cit., p. 477.

⑥ まず「東路」は、ケルンからニールンルクを経て、アウグスブルグに、フッから二の路が考えられた。この「東路」は、Augsburg-Füssen-Fernpass-Landeck-Bolzano-Trento-Bassano-Mestre 他、Augsburg-Partenkirchen-Innsbruck-Brenner-Dobbiaco-Pieve di Cadore-Serravalle-Treviso の路である。また、Augsburg-Salzburg-Verfen-Radstadt-Spittal-Villach-Tarvisio-Gemona-Mestre の路も考えられる。「西路」route occidentale は、スイスに入るまで、ロマン語圏を、はりケルンを通るまで、リッティヤンベルを経てのルートである。cf. Brulez, p. 469; E. von Ranke, V. S. W. G., Bd.

xvii, 1924, op. cit., SS. 77f. 西路を通ったイタリア商人が、ヴェネチアよりもアンコーナを物貨集散地として選んだのは、イタリア都市間の政情によるとと思われる。

⑦ Brulez, Annales, p. 496 の表を参照。これによれば、年間カーシー織・二四五二荷、毛織物・一八一〇荷、セイ・八二七荷、縮毛・二一七荷、リネル・二一七荷、毛氈・一六六荷、各種織物・三九六荷、羊毛・三六二荷、胡椒・四二三荷、その他七五荷となっている。なお、この一言注意しておかねばならぬのが、当時のアントワープ貿易に演じた東邦の物貨胡椒の役割についてである。従来の通説によれば、胡椒こそは、当時の国際貿易の花形商品のように考えられてきたが、事実はこれと全く相反する。誤謬の根源は、胡椒の高価という従来の考え方であり、それが臆説にすぎないことは、税表の分析から分る。因みに一荷についての胡椒の値段は、粗悪な毛織物一荷の値段に等しく、平均して毛織物の値段は胡椒より高い。胡椒の用途については、われわれも今ひとつ分明にしないが、ブリュッレの以上のような見解は、当時の貿易の再考の上に考慮を要する。しかし、いずれにしろ、たとえば一五四三—四五年度の貿易額の上において、胡椒の占める比率は、三・七%にすぎぬ。毛織物→大陸銀→胡椒というわが国の通説は、この点からも今後検討を要するであろうと思われる。

⑧ Eileen Power and M. M. Postan, op. cit., p. 100.

⑨ “Gott hat uns Deutschen dahin geschleudert, daß wir Gold und Silber in fremde Länder stoßen müssen, alle

Welt reich machen und selbst Bettler bleiben, England sollte wohl weniger Golds haben, wenn Deutschland ihm sein Tuch liesse," Luthers Werke, xxii, 201, Schanz, op. cit., Bd. i, S. 67.

⑩ cf. F. Edler, Wincombe Kerseys in Antwerp, 1538-44, Ec. H. R., vol. vii, 1936-7, pp. 57-62.

⑪ Bindoff, op. cit., p. 22. 当時英国製毛織物の市場が中欧にあつたことの叙述としては、ラムゼーもまた梗概ながら書いてゐる。Ramsay, pp. 14 seqq. 従つて、ラムゼーで説くことは、決して新奇な説ではなからう。

十六世紀前半に成長を続けた英国産毛織物の市場は、通説のように新大陸にあつたのではなく、まずアントワープ市場を介する、こうしたヨーロッパ本土、なかならず中欧およびレヴァント地方を主とするものであつたし、そこにまた、十六世紀英国経済に占める首都ロンドンの特殊な繁栄の基盤があつた。われわれは、もう一度以上の点を確認しておきたいと思う。いや、ロンドンの繁栄だけではない。このような毛織物輸出の好況が、英国社会に与えざるをえなかつた諸結果については、これまで行われた国内経済史の研究成果とも一致し、また新たなより広いパースペクティブのもとに国内経済の変化を見透させるものでもある。

たとえば、かの囲込運動である。^⑫ 周知のように、この運動自体は、中世末期以来の現象であり、その原因論については、研究史的には厄介な問題にさらされる。^⑬ しかし、それがとくに未曾有の好況期であつた三、四〇年代に、新しい規模の拡大と性格転化をとげつつあつたことを、ここに改めて注意しておきたい。最近の地方史研究が明らかにしているところによれば、それはこの時代になつて、初めて広汎な農民層をも、そのトレイガーとして、渦のなかに巻きこむこととなつたのである。^⑭ テューダー政府をして、もっとも精力的な土地問題への関心を志向させた時期は、すでにトリーニーが注目しているように、この時期に当つている。^⑮ 社会思想的には、ヘイルズ、ラティマー、クロウリーらいわゆる「コモンウェルス・メン」 Commonwealth Men の雄弁が、もっとも繁きかれたのも、ほかならぬこの時期である。^⑯ 時の政府を震撼させたノーフォーク農民一揆の怒号は、実はブームの時期と一致している。^⑰ 時流への反逆は、時流の早さを暗示していたといえるのである。以上は、主としてこの輸出ブームが、農業面にひきおこしつつあつた変化のいくつかであるが、いっぽう工業面においても、

たとえば、ウィリアム・スタンプのような企業者のもとに、はじめて「工場制度」の原型がみられるとされるのも、まさにこの四〇年代である。マーク・トゥエインの童話とともに、すでに伝説化してしまったエドワード六世時代の明暗のすべてを、外国貿易に帰してしまうことは、明らかに誤っている。しかし、貿易の好不況が、いかに国民経済のなかに深く食いこむようになったかは、以上によっても、やや明らかであろうし、いづれ次の叙述をもつて、さらに明らかとなることであろう。今日、英国において、「貿易か死か」とは、よく聞かれることばである。同じ島嶼民族の運命として、他人事とはいえぬ問題を含んではいるが、そのような国民経済のパターンの形成されつつあった時期を、この国の過去に求めるとすれば、十六世紀前半期こそは、まさにそうした時期であったことを看過することはできぬのである。

① 開込運動については、とくにヨーマンリーとの関係を論じたものとしては、拙稿「開込運動をめぐる英国農民事情」（『史料』三五の三、昭二七）参照。

② 小松芳喬『イギリス農業革命の研究』（昭三六）、第一部、（一）、第一次インクローウジャの原因、二七頁以下参照。

③ 小松教授前掲書、二四一頁参照。ここには、レスターシアについてのサースク女史の注目すべき研究成果が紹介されている。

④ R. H. Tawney, *The Agrarian Problem in the Sixteenth Century*, 1912, p. 358. 一五七七年のウルジーの開込調査をのぞけば、とくに政府が土地問題に関心を志向した時期として、一五三六―四九年、一六〇七―一六一八年、一六三〇―一六三六年の三期があるとトーニーは考える。

⑤ 「コモンウェルス・メン」については、とりあえず出口・越智訳『宗教と資本主義の興隆』（岩波文庫、下巻）、第三章、第一節を参照。なお、出口勇藏監修『近世ヒューマニズムの経済思想』昭三二、参照。

⑥ 主として、国内経済史的見地からこの問題を取り扱ったものには、富岡次郎「ケットの反乱の歴史的意義」（『西洋史学』三五、昭三二）。ブームとこの叛乱との関係を示唆しているのは、やはりフィッシャーである。cf. Fisher, *Commercial Trends*, p. 157.

⑦ Fisher, op. cit., p. 156; Bindoff, op. cit., pp. 126-27.

（以下次号）

（京都大学助教授）

blem of 税 and 課 must be considered. But the general discussion of 均田 and 兩税 systems involves many problems with wide ramifications and therefore, in this article I have confined myself mainly to a discussion of the terminology of the taxation system.

To enumerate the main points: 1.) Terms such as 課役, 課調, 課物, and 課 itself in the 唐律 (Tang Laws) and 疏議 (Commentaries) signify exactions in kind for various taxes or labour levies. 2.) 資課 is generally considered to refer to payment of money for relief from the labour levy, and as this was applied as part of the salaries of officials, their salaries came to be known as 課料 and 官課, and later official incomes were called 官課 and 課利. 3.) 課 was levied against 丁身 (adults) and was fixed at a certain rate by the Laws, while 税 was levied against income and profits from fixed or other assets. 4.) Even though the 兩税法 maintained a fixed total revenue from all taxation, as the object of taxation shifted from individuals to household property, the old form of legally equalized levies against individuals disappeared. That is, 賦 (tithes) and 課 (levies) gave way to 税 (taxes). 5.) However, as the levies of both central and provincial governments, whether in the form of tithes or taxes, were both actually maintained at fixed totals, from this point of view they were similar in nature. Perhaps this is the reason why both taxes were called either 賦税 or 税賦.

English Economic Trends on the Eve of Colonization

by

Takeomi Ochi

For the generation breathing the air of the mid-twentieth century it is unavoidable, and even right, to think of national problems in accordance with the international circumstances. This is, however, a new experience for a nation which has been secluded intellectually and politically from the outer world for the greater part of her history. Self-sufficed in such a community,

one tends to develop a peculiar way of thinking which colours in turn even the interpretation of foreign history. This may result, for instance, in a theory of self-development of national economy like that to which students stick so tenaciously in post-war Japan. In studies of English history, they have been mainly concerned with the conditions to England, not with her relations with the outer world. This is, I think, why the history of 'English trade has not been treated as it deserves. It has even been brushed aside under the name and on the pretext of circulationism. This will not hold good when we think of a country like England.

This paper is an attempt to trace the economic trends of the sixteenth century as they were revealed in woollen export from London. The attempt was made, as is well known, in a pioneering work of Professor Fisher to which this paper owes much. The economic trends depended on the Antwerp mart in the sixteenth century and my concern in this paper was, first of all, to trace the trade from Antwerp onward into the Continent. This attempt will also be justified when we consider the theory in this country that the main part of the woollen export was directed to America in exchange for silver after the geographical discovery. In the sixteenth century the market for English woollens was not in America but in Middle Europe and the Levant. Secondly, my interest was to revalue the Elizabethan policies in the light of the changed mood after the depression of the 1550s. To a student of English history the making of the Empire will be a vital problem. This paper will be a contribution to the problem, explaining when and why the first step towards colonization was taken in the history of England's trade.

The Constitutional Conflict in Prussia and the Formation of the National Liberal Party

by

Yukio Mochida

As one of the features of our historiography, an emphasis has